

# 日本をキリストへ 協力

「日本をキリストへ」  
伝道団体連絡協議会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1  
TEL 03-3291-5035

## 協力とは何か 1

伝道団体連絡協議会会長 羽鳥 明

「伝団協」は、福音のため協力することを、モットーとして存在します。その協力とはいったいどんなことでしょうか。

第一回ピリー・グラハム東京クルセード（一九六七年）の時、私は実行副委員長、総務局長に加えて通訳の任まで負わされました。一つでも多くの教会、一人でも多くのクリスチャンの協力を目指して死にもぐるいでした。

教会が足並み揃えて、東京四百万世帯を一つ残らず実質的訪問を成し、各教会に祈りの細胞を組織し、その数四千三百の報告を受けた時、安堵と喜びのため息がもれました。

神与の励ましの軍勢に押し出され、私たちは総動員伝道に乗り出し、一九七〇年四国四県での実施を決しました。委員長は若輩の私でしたが、本田弘慈、安藤仲市、ストローム、マクビーティ等など、有力メンバーが集まりました。総伝の総合目標、根本的諸原則についてはすべて一〇〇%聖書的でしたので、確信していましたが、細部については、何をどうやっていいのか私たち自身よく分かっていませんでした。四国で開始されてから、私は、一ヶ月かけて、不眠不休で、マニュアルと教材を書き上げましたが、ピリー・グラハム・クルセードの経験とその教材が頼りでした。

本田弘慈先生と共に、私は四国のほとんどの教会・教職を訪問しました。「どれだけの教会が協力したら、総動員ということになるのかネ」「さあ……八〇%から八五%位でしょうか」。私たち自身わかりませんでした。しかも当時の日本の教界には造反の嵐が吹き荒れ、宣教・伝道どころではありませんでした。

しかし、八五%の四国の教会が協力し、成功し、今も余韻は継続されています。

一九七二年に沖縄で総伝を実施した時には、実に九〇%以上の教会が協力しました。今では沖縄ではクリスチャン人口六%を目指して前進しています。

ピリー・グラハム東京国際大会の余勢に乗って、日本福音同盟（JEA）も結成されました。

JEA主催で第一回日本伝道会議が開催された時、私は、JEAのリーダーシップのもとで、全国全教会の協力で、目標を掲げて全日本規模の宣教運動の出発を、願い、祈り、私なりに奔走しました。厚い壁が立ちふさがり、不能でした。

現在、JEAの現理事長は、JEAは協力のために存在すると公に宣言しています。小助川総伝運営委員長が「二〇〇〇年を画期的宣教年としよう」と呼び掛けられたとき、JEAは理解を示してくださいました。リバイバルの主催者、神ご自身（イザヤ六四・四）も、中心要素は協力であると示しています（ゼバニヤ三・九）。

さて今の日本での、神ご自身の総協力のストラテジーは何なのでしょう。学びたいと思います。 続く

# 宣教の原点

## 原 登

「十字架の言葉は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である」Iコリント一・一八

初代教会のケリニグマと言われる宣教の本質は、福音書や、使徒行伝の初めにみられるように、イエス・キリスト、特にその十字架と復活を頂点とするものです。使徒パウロは、この伝統を受け継ぎ、この手紙の終りにおいて、こう言っています。「わたしが最も大事なことであなたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであつた。すなわちキリストが聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして、葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえられたこと」(Iコリント一五・三、四)である。彼は、この事を短く「十字架の言葉」と言っているのです。

キリスト教は十字架の言葉であります。昔、インデアンの使徒であつた、デヴィド・ブレナードが死んだ時、彼の友人、ジョン・エドワードが、ブレナードの日記を編集しました。その中に、十字架に対する証しがあります。「私は決してキリスト、彼の十字架につけられ給うた事を忘れる事は出来ない。私は私の友人であるインデヤンが、キリストと、その十字架につけられ給ひし事のこの大いなる福音書の教理によって捕らえられる時

に道德に関して教える必要がなかつた。私はこの福音に道德が当然服従してゆくを見出したからである。これはたしかなる福音の果実である」と。

この一八節の言葉は、使徒パウロの福音宣教の中心的な確信であります。彼は、この確信を裏付として、ローマ人への手紙を書き、ガラテヤ人の手紙を書き、十三通の書簡全部を書いたのです。

コリント人への手紙において、使徒パウロは、宣教の原点を「十字架の言葉」と記しました。知恵の言葉、即ち雄弁のみを重んじたがるコリント人に対して、これはまさに「頂門の一針」でした。十字架の教えは、雄弁の材料にはあまりに単純で素朴です。しかし、単純で素朴な十字架の言葉によってこそ人の魂は救われるのです。ここでパウロは、宣教の内容は、十字架の言葉でなければならぬと言っているのです。

次の点は、宣教と人です。いったい誰が宣教の担い手になりうるか(一・二六―三二)には、人の問題が取り上げられています。そこに選びの問題、召命の問題があります。

第三の点は、宣教の原動力です。それは聖霊であります。二章・一―五節には、アテネ伝道に対する反省が記してあります。そこでパウロは「わたしの宣教は、霊と力の証明に」よると明言しています。

ところで、いくつかの伝道団体が、来るべき紀元二千年に対して、様々な協議を繰り返し、方法論を検討していると聞きました。イベントとして、聖書展、音楽祭、救済二十四時間チャリティ、ウォークラリー、キャンドル・ライト・サービス等、祈りの運動、霊的な大会、信徒訓練会、伝道大会等を、全国で展開するといふものです。このため、「聖誕二千年を考える会・世話人」を開き、さらに多くの団体・教会によって「フォーラム」の開催を検討していこうとしているようです。

韓国のキリスト教界では、全世界のすべての国に一人の宣教師を送るといふプランがたてられていると聞いています。日本では、拡大された土壌を作り、いろいろな教派、教団が加わられるようにしたい。そのため、聖公会、カトリック、NCC、カリスマ、福音派などのキーパーソンと話したい、などの案があります。

しかし、さまざまな教派・教団には、それぞれなりに歴史があり、また伝統があり、神学があります。また、それに付随する人間的な問題もあります。したがって、それら乗り越えて一つになることには多くの課題があります。しかしながらいかなる教派・教団といえども、「宣教の原点」である十字架の教えには共通した理解があると思えます。それはキリスト教の福音は「十字架の教え」であるからであります。

十字架の縦の線と、横の線とが交叉するように、主イエス・キリストによって一つになるといふ可能性を私たちはそこに見出さなければなりません。

(日本キリスト伝道会 実行委員長)

# 今こそ広い視野をもつて 協力を

栗原一芳

最近ニュースをつければ住専問題。どうしてこんなことになったのか。責任のなすり合いのようなことがおこなわれているが、確実に大蔵省の権威が落ちた。エイズ問題で揺れている厚生省。ついに責任を認めて立ち上がったが、どうして重大な問題を見逃ごしてしまったのか。絶望的に思えた官庁や役所もその脆さが目立ってきた。割り増し出張費の問題なども明らかにされ、それに追い打ちをかける。依然として後を断たない「いじめ自殺」。文部省でも手のうちようがなく頭を抱えている。「政府が何かしてくれろ」から「自分たちから訴え働きかけていく」という積極的な面と共に自己防衛的な気運が高まってきているように思われる。

さてそんな中、今年一月二十三日JTB A東京シンポジウムが持たれ、日本の現状分析と宣教姿勢が吟味された。その中で、社会の人々は教会に期待していない、社会の中で「見えない教会」という指摘がなされた。クリスチャン新聞は「社会との接点を持ち、社会に影響を与える教会像の必要浮き彫り」と評した。人々が不安に思い、多様化した社会の中で確立した価値観を持って、ま

すます孤立化していく中であって、その必要との接点を持たないとしたらキリスト教界全体にとって悲劇的なことである。このような状況の中で、各種伝道団体がその専門色を生かして多様化する社会のニーズに応えてゆき福音を伝えていくことに大きな期待がかけられていると思う。歴史的にも主はその時代の必要に応じて様々な伝道団体を起こされた。今日、専門家の存在は大きいのである。また社会との接点という面で、教会とは違った形でのアプローチの可能性も持っている。大胆な宣教と共に人々の感じているニーズから入っていくバックドア・アプローチも必要である。マルチメディアを用いてのこの世への接点も期待されているところである。

伝道団体の働きは、一教会できないことを超教派的に展開していく使命もある。国際化の時代、ことにアジアの国々の人々への戦争犯罪の悔い改めと、同時に主にある愛と赦しを体験し、主にある交わりを社会に証しすることは大きな意味があると思う。また働き手の少ない日本宣教のニーズと海外で日本宣教に重荷を持つ人々のリソースとを結びつけていくことも伝道団体、ことに国際的

宣教団体に今日課されている使命ではないかと思う。世界的には「Joshua Project」としてすでに働き出している。また伝道団体には地域教会に任せ、教会を助けると同時に、地域にある教会間の橋わたしとなり、その地域での牧師間、信徒間の交わりを促進させる役割もある。地域に根ざした教会という時、隣の教会のこともよく知らないというのは残念なことである。

今後、ことに強調されるべきは伝道団体同士の協力ではないだろうか。主の年二〇〇〇年を目前に、世界宣教は急務となってきた。そんな中、宣教における「協力」「パートナーシップ」ということが言われるようになってきた。教会間の協力、地域教会と伝道団体の協力、さらには伝道団体間の協力。すでにロシア宣教のための「コミッション」、AD二〇〇〇ムーブメント等を通じて伝道団体間の協力が動きだしている。五月のビル・グラハム衛星放送では何十億の人々に福音が届けられるという。ウィクリフ、CBN、EHCなどそれぞれが世界福音化をゴールに働きを進め、そのゴールに近づきつつあるが、それらが協力することで福音化が総合的に加速されることは間違いない。今こそ「神の国メンタリティー」という広い視野をもって協力してゆくことが必要とされているのではないだろうか。日本の教会未設置地区伝道もCISが提唱するように超教派的に協力し合ってより全国的戦略を持ってできないだろうか。いよいよキリストの体が共にみ心を実現していくことを目指して進んで行くことを願ってやみませ

# みんなで参加しよう!!

豊かな信仰生活のパートナー

## 第10回 96伝道団体フェスティバル

1996年5月24日(金)～25日(土)

テーマ・21世紀を担う子供たち

5月24日(金)

- クリスチャンホーム対象講演会 午後6:30～8:30



「子供の未来と親のまなざし」

講師/パトリック・マケリゴット氏(洛西キリスト教会牧師、著書「マケリゴット家の娘たち」)

5月25日(土)

- 各団体展示/バザー 午前10:00～3:30

- 婦人対象講演会 午前10:30～11:30



「いじめと不登校を考える」

講師/伊藤直治氏(つくば福音バプテスト教会牧師、著書「もう学校だけにはまかせられない」)

- 子供フェスティバル 午後1:00～3:00

★同時開催

CS養成講座(詳細は、CS成長センターへ。TEL03-3233-26812)

会場/お茶の水クリスチャン・センター

主催・連絡先/伝道団体連絡協議会 TEL03・3291・5035

### 二月五日、OCCCにて 新年情報交換会開催

二月五日、一九九六年の各加盟団体の働き、祈りの課題を聞き共に祈り合う新年情報交換会が、お茶の水クリスチャン・センターを会場に開かれた。

礼拝は、羽鳥明会長がヨハネの福音書四・三四「三八」二千に向けて、一致協力して日本全体にキリストを明るく伝えたい」と次の五点から話された、永遠の視点を持ち、今という視点を持ち、焦点のある、分担して、継続して、忍耐して、働きを続けたい、と語った。第二部その後、各加盟団体の報告、懇談、祈りの時を持った。

#### 伝道団体連絡協議会

顧問:岡村又男、堀内 願、K・マクビ

イテイ

名誉会長:本田弘慈

会長:羽鳥 明

副会長:原 登、村上宣道、多胡元喜

役員:岸田 馨、滝元 明、姫井雅夫、

鈴木留蔵、浅見鶴蔵

常任役員:片岡伸光、渡辺佐次郎、鈴木優子、

鈴木 繁、常田美香、柳沢 清

監査:辻岡健象、古屋幸助

発行日 一九九六年四月五日

発行者 羽鳥 明

編集者 鈴木 繁